

# 何か違うと気付いても…揺れる親の気持ち

育てにくさとは?

—わが子はかわいい。でも「ちょっと

育てにくいな」「気になるな」と悩みを抱えるお父さん、お母さんたちがいますが、実際にはどんな点が「育てにくく」と感じているのでしょうか。

田中先生(以下、田中) 子どもたち

の中には、やりたてもできない、努力しても実力が出しきれずに苦しむ子どもがいます。例えば、せっかちで、じつとしていることが苦手だったり、「広報

D、自閉症などの症状(5ページ参照)がありますが、実際にはこの子はADなった「発達障がい」ということでHD、この子は自閉症といったように、

—「発達障がい」には、LDやADHがありますから、何よりその子の特性をいち早く発見することが大切なことです。というのも、先に挙げた例のほかにも、走ると必ず足がもつれたり、いしかり」と読むところを「広いし」というふうに読める文字だけ虫食いで読み書きにつまずく子もいます。

—それは「知的障がい」ということですか?

田中 いや、知的な遅れではないけれども、心配がないとも言えない、いわば「はさま」にいるんです。

—「はさま」最近よく耳にするように

なった「発達障がい」ということで

田中 はい。ただ、「うちは言つても、子どもによつて症状は実にさまざ

までですから、何よりその子の特性をいち早く発見することが大切なことです。というのも、先に挙げた例のほかにも、走ると必ず足がもつれたり、いしかり」と読むところを「広いし」というふうに読める文字だけ虫食いで読み書きにつまずく子もいます。

—それは「知的障がい」ということですか?

田中 そうなんですね。状況によつて症状が変わりやすいため、本当に診断が難しい。

—いくつも病院を回つて、それぞれで違うことを言つて、悩む親もいるそうです。

田中 そうなんですね。問題は、その特

性だけがとても強く現れて、なおかつ日常生活をする上で支障を来たした場合だと思うんですね。風邪気味と

田中 病名で悩むより、大切なのは「この子はこういう資質を持っているんだ」と、子どもの特性を理解してあげることだと思うんです。先ほど診断が難

手とのコミュニケーションがうまく図れない子など、ケースはさまざまです。

大人のかかわり方次第で、子どものかかわり方が決まります。

田中 そうなんですね。例を挙げると、鉄棒の逆上がりが苦手な子に「なぜ逆上がりができない!」と言うか、「代わりにキミは走るのが得意だね」と声を掛けるかで、その子の気持ちには大きな違いが生まれますよね。

—しかも、そうしたことはどの子にもあります。だから、障がいかそうでないか判断するのは、確かに難しいかも知れませんね。

田中 そうなんですね。問題は、その特

性だけがとても強く現れて、なおかつ日常生活をする上で支障を来たした場合だと思うんですね。風邪気味と

田中 思えば生活に気を付けるけど、肺炎になりそうだと思つて病院に行く、そのような問題だと私は思うのです。

## 特集

シリーズ いしかりの子どもたち【最終回】

# 「うちの子は、うちの子でいい」と思える日まで

—わが子と楽しく向き合うためのメッセージー



平成18年6月号から「シリーズ・いしかりの子どもたち」と題して、子どもをめぐる環境を追いかけてきた特集もいよいよ最終回を迎えます。

締めくくりとなる今回は、「よその子より子育てが難しい」と悩む親たちと向き合つてきた児童精神科医の田中康雄先生に、本当の意味で「子育て」に必要なこと、大切なことは何かについてお話を伺いました。

## 「個性」と受け止めることから始めよう

親たちの葛藤

—これまで例に挙げていただいたような、いわゆる「子育てしにくい子どもたち」は、基本的に親の子育てのせいではないということですね。

田中 もちろん、子どもだってわざと親を困らせるためにやっているのではありません。発達障がいの場合は子ども自身が抱える、中枢神経系のアンバランスが問題になつていると理解しています。

—でも、そのように割り切るまでは時間が掛かるのでは?

田中 それはもう、さまざまなお母さんがいます。親、特にお母さんは、どこかで「自分の育て方のせいじゃないだろうか」と、まず罪の意識を持つているんですね。そして、相談機関に行つて「お母さんの育て方のせいですよ」と言われるんじゃないかと思うと相談に行けない。一方で、育て方に問題がなかつた場合は子どもが「障がい」

を持っていることになるわけですから、それはそれでやっぱり困ると、相談に行くのをためらってしまう。こういう悪循環の中に親たちはいるわけです。

—今、まさにそうした葛藤の中で苦しんでいる方に、アドバイスするとすれば?

田中 「育てにくい子ども」といっても、すべてが悪いわけではない。部分的な生きにくさがあるだけ。そういう子だつて、とてもセンスが良かつたり、さりげない優しさがあつたり、周囲の緊張を和らげるムードメーカーなどころがあつたり、良い面もたくさんあるんですから。

うちの子はうちの子

—とはいって「障がい」と診断されば、やはり不安に感じたり、途方に暮れる方も多いと思います。

田中 そうですね。だからこそ、石狩市ならば「こども発達支援センター」(7ページ参照)という相談先

をまずは積極的に利用してほしいんです。そもそも支援センターというのは、障がい児だけを支援する所ではなく、子どもの発達を支援する所です。よく親が「こんなにいい子なのに、どうしてこの悪いところが直らないんだ」とイライラしてしまって、親子ともども穴に落ちてしまうみたいなことが起ります。こんなときこそ、第三者が「それはお母さんのせいじゃないよ」「この子も悪気があってやっているわけではないんだよ」と言ってあげることで、親子が冷静になれる場合がよくあります。時には医学的に説明してあげることだってできるわけです。相談に行くことで「やっぱりそうだつたんだ」と、お母さんが安心されるケースは本当に多いです。

—とすれば、私たちは「障がい」の文字に過剰反応しているのでしょうか。

### 田中 康雄先生

北海道大学大学院教育学研究科付属子ども発達臨床研究センター教授・児童精神科医・臨床心理士。旭川医科大学外来医長、北海道立緑ヶ丘病院医長、国立精神・神経センター精神保健研究所児童・思春期精神保健部児童期精神保健研究室長を経て現職。地域や現場に積極的に足を運び、日夜子どもをめぐる問題に取り組んでいる。

